



雨座敷



凜音

墨染めの闇間から、白く絹糸のように垂れ下がる雨粒はその囁きを永遠に繰り返しつつけるかのようだった。円い雪見窓は白い障子紙まで黒く染め、朱塗りの格子もまた黒い。千尋は雪見窓の対角線上の角へ背中を押し付け、其処をじっと見つめていた。霖雨は季節を感じさせない気温を保ち、湿った冷たい空気は座敷の床へ沈殿している。その沈殿は千尋の足を凍りつかせ、また千尋自身の動こうという気持ちもまた凍りつかせていた。

いつから座敷に閉じこもったままだろう。何百万と繰り返した問答は尽きることなく千尋の脳裏を掠めるが、千尋は既にその問答には飽いていた。ただこの昼夜も判らぬ昏い座敷へ雨によって軟禁され続けている日々は怠惰で、居心地も悪くなかった。

「——……、」

閉ざされた襖の向こうに人の気配がある。千尋はこの訪問者が誰なのか知っていた。唯一心待ちにしている訪問者だと云い換えてもいい。

滑らせるように襖は開かれ、中へ入ってきたのは希夜である。名の通り希に見る、夜のように黒い髪は肩の辺りできちんと切りそろえられ、後ろ手に閉められた襖のとん、という音に合わせるように一つ揺れた。彼の纏う白い浴衣は彼の背景の闇と髪の色と混じりあって浮かび上がるようにくっきりと千尋の視線を捕える。白い両腕が泳ぐように千尋の許へ伸ばされた。

このときいつもと違ったのは希夜が食事を載せた盆を持っていないことだった。頭を抱え込まれることに千尋は抵抗しなかった。

「……雪が降るよ、」

希夜は云って、千尋の視界を塞ぐように躰を動かした。千尋の視界から雪見窓が消える。

「雨だろう。雪ぢやなくて、」

千尋は、それでも躰は動かさずに反論した。希夜の指が千尋の栗色の髪を撫でる。いつまでも、いつまでも。それは座敷の外に降る雨に似ていた。いつまでも、いつまでも。

やがて希夜は髪を撫でるのを止めて、千尋から離れた。

「雪になるそうだよ。だから、君とはお別れしなくちゃいけないかも知れない。」

希夜はそう云った。そして座敷から出て行こうとする。

「待って。どうして、」

千尋は問うた。しかしそれには答えずに、希夜は部屋を出て行った。

連れてこられたのだったか、自分から望んで今の場所にいるのか、千尋はそれを覚えていなかった。或る日の食事のときに、運んできた希夜に対して名前を訊いたのが初めての会話だったように思う。希夜は何時も不思議に無表情だが、少し馴染んできてくれていると千尋は思っていた。真綿で首を絞めるような退屈の中、希夜がきちんきちんと訪れて食事を運んでくることだけが千尋の楽しみだった。

「雪……か。もうそんな季節なのか、」

千尋は誰にともなく——千尋の部屋には千尋一人きりだ——呟いた。云われてみれば、少し寒いような気もする。千尋は敷いたままの布団から毛布を一枚取り出すと、肩に掛けて、壁に凭れ掛かった。

何故、希夜は雪になったら別れなくてはならないのだろう。何日と数えた訳ではなかったが目覚めれば何時も雨が降っていた。雪に成る程、寒い季節だとも千尋は思わなかった。

「希夜……、」

名前を呼んだ処で彼はやって来ない。食事のとき以外に彼が現れるのは滅多にない事だった。今日のような突然の訪問と、別れの言葉。千尋には何がどうなっているのか解らなかった。誰も居ない、一人が住まうには広すぎる座敷で、千尋は微かな恐怖感を覚えた。希夜が居なくなったら、自分はこの雨の降り続ける座敷から出て行くことになるのだろうか。それとも別の人間が希夜の代わりを果たすのだろうか。

雨は止む気配を見せず、風に揺れることもなく、細い糸のように囁きあいながら降り続けている。少しずつ、意識が濁り始めた。眠りに引き込まれる感覚。微かな抵抗は徒労に終わり、千尋は重い瞼を閉じた。

「千尋、」

彼を揺り起こす者がある。希夜だった。

「……希夜、」

まどろみから覚めきらないまま、千尋は希夜の顔を見た。普段は無表情な希夜の顔が、悲しげに見えた。

「雪が……降るんだ。幸いにも今日は降らない。然し、近く別れの時が来る。眠らないで居てくれないか、」

千尋は頷いて、躰を起こした。雪見窓に目を遣ると、雨脚が強くなっていた。広い座敷の中にも其の音が充満する。

「どうして雪が降ると、君と別れなくちゃならないんだ。雨だったらいいのか、」

「——僕は雨専用だから、」

訳の解らないことを云って、悲しそうな顔をする希夜を、堪らず千尋は抱き寄せた。

「何なんだ……僕には、解らないよ。どうして僕が此処に居るのかも、希夜と別れなくてはならないのかも。……教えてくれないか、総て、」

希夜は曖昧に首を振った。

「これは君の夢、願望なんだ。けれど君は目覚めなくちゃいけない。僕は——君とは違うから。雪が降れば、僕は雪に溶けてしまう。……解るだろう、さよならなんだ。」

千尋の腕の中で、小さく希夜は震えていた。雨音だけが二人を包む。二人は暫く寄り添ったまま最後の時が来ないよう、祈っていた。

やがて希夜は千尋から離れると、出入り口となっている襖へ向かった。

「食事を用意してくるよ、」

とん、と襖が閉まる。云い様の無い寂しさが、千尋の心を締め付けた。

千尋の夢、願望。希夜はそう云っていた。この兩座敷は目覚めたくない、と云う千尋の願望なのだろうか。それとも、希夜と離れたくないと云う願望なのだろうか。目覚めなくてはならない——其れは、千尋が眠っていると云うことなのだろうか。幾ら考えても、千尋の中に答えは出なかった。

「千尋、」

襖が開いて、希夜が現れた。希夜は食事を載せた盆を持ってきていた。千尋は何故か食べる気がしなかった。希夜の云った「さよならなんだ。」の言葉が頭から離れなかった。

「希夜、何で、さよならなんだ。僕は……、」

「食事が済んだら、話がある。君に伝えたいことがある。」

千尋に言葉を発する隙を与えず希夜は云った。盆を置いて襖を閉める。とん、という音と、遠ざかる足音が聞こえた。千尋は食事に手をつけたが、どれも砂を 噛むような感覚だった。食事の最後に幾分温んだ緑茶を啜ると、千尋は、今迄で初めてそっと襖を開いた。盆を滑らせるように押し出して、辺りを窺う。廊下は がらんとしていて、ぐるりと囲まれた中央に中庭が見えた。襖から真っ直ぐに廊下が続いていて、右手にもまた廊下が続いている。太い柱が一本立って其の向こうに昏い中庭が見えた。敷き詰められて整備された白い石に雨がぶつかる小さな音が響いていた。

「希夜……、」

呼んだ処で返事はない。千尋は思い切ってそっと一歩、廊下へ踏み出してみた。裸足に伝わる冷たい気の感触に云い様のない不安を覚えながらも、廊下を恐る恐る進んでいく。思うより老朽化の進んでいる所為か踏み締める度に床が厭な音を立てた。

やがて壁に突き当たった。仕方なく千尋は右に折れてまた歩き始めた。足が酷く冷たかった。希夜は、何度もこの寒さの中を食事を運んできてくれていたのだ。希夜に、会いたかった。

ふと中庭の方を向くと、其れ迄確かに居なかった筈の希夜が、白い浴衣が濡れるのも構わずに空を仰いで立ち尽くしていた。

「希夜……希夜、」

整備された小石を蹴散らして、千尋は希夜の許へまろびよった。

「此処だったんだ、」

「どうして、あの部屋に居なかったんだ、」

「そっちこそ、どうして、さよならなんて云うんだ、」

希夜はすっきりと伸びた首を心持ち俯かせ、云った。

「……やはり、君が、悲しい顔をすると思ったから、先に消えてしまおうと思ったんだ。覚えているかい、あの雨の日を、」

「……雨の日、」

希夜は愁眉を開くことはなかった。その代わりに、ぼつぼつと喋り出した。

「横断歩道を渡りきれなくて、車が突っ込んできたのに気付かなかっただろう。あの日も丁度雨が降っていたね、」

「……、」

「あの日、僕等の街には雪が降り始めていて、君は直ぐに車の下から助け出されたけれど、僕は——、」

何か白いものが視界に混じり始めた。見るとそれは、希夜の爪先から巻き上がっていた。足が段々、冷たい雪に変わって空へと上っていく。

「希夜、」

「僕は冷たい雨が雪に変わる頃、段々と君の顔が見えなくなってきていて……、」

舞い上がる雪は留まることを知らず、希夜の躰はもう膝より少し下がなくなっていた。

「待って、希夜、」

「ほら、雪になった、」

希夜は顔を上げて、初めて微笑んだ。然しその笑顔は悲しそうだった。

「座敷へ戻るんだ。今なら間に合う、」

「厭だ、」

「頼むよ。最後のお願いだ、これくらい聞いてくれてもいいだろう、」

千尋は希夜に縋り付いた。酷く、冷たい躰だった。雪は胸の辺りまでに達し、降っていた雨も雪に変わり始めた。

「千尋、お願いだから、」

云って、希夜は千尋の手をやさしく振り解いた。千尋は振り返らずに、座敷に戻った。振り返ってしまえば、屹度希夜の許に居続けることになってしまう。希夜はそれを望んでいないのだ。あのやさしい手がそれを物語っていた。座敷に駆け込んで、襖を乱暴に閉めて、忙しくなった呼吸は涙を誘った。千尋の目から、ぽろぽろと涙が零れ落ちた。少しずつ思い出していく、記憶の糸を手繰り寄せながら千尋は頭を抱え込んだ。

交通事故。

風花舞う夜に希夜と二人で帰る途中に、信号無視をした車が突っ込んできたのだった。意識は朦朧としていたが、希夜の姿だけは見えた。車の下敷きになっている希夜――

「……ッ、」

雪見窓の向こうでは、曇りようだった雨が次第に固まり始め、雪となっていった。千尋の目にはそれが、希夜の最期に見えた。

伍

「希夜、」

「千尋……良かった、気が付いたんだ、」

希夜のものではない声が出て目を開けると、其処には級友の姿があった。

「希夜、希夜は、」

彼に尋ねようと躰を起こすが、躰中が痛くて起き上がれなかった。包帯を巻かれ、点滴をされ、病院らしき建築物のベッドで千尋は横になっていた。級友は千尋の肩をそっとベッドへ押し付けて、悲しそうな顔をした。

「希夜は——……、」

彼は曖昧に首を振る。泣いているようにも見えた。

「……嘘だろ、」

「……、」

千尋の目の前が、真っ暗になった。ふ、と意識が途切れる。最初は細切れだったのが、段々深い眠りに落ちるようになっていった。級友は慌てて看護師を捕まえていたが、千尋は其処までしか解らなかった。瞼を閉じたのだ。

「き、よ……、」

何処か遠くから、囁くような雨の音が聞こえた。